

<前回>古プロテスタンティズムから啓蒙的キリスト教合理思想へ

- ・絶対王政から国民国家・民主主義へ
- ・封建的経済システムから近代資本主義へ
- ・世界観の変貌とコロニアリズムの進展
- ・古プロテスタンティズム：16世紀から17世紀。正統主義と敬虔主義。
新プロテスタンティズム：18世紀から。

啓蒙主義の時代、信教の自由＝寛容論、自由教会

(1) 正統主義

1. 「宗教改革直後の神学は、正統主義的方向によって支配されている」、「宗教改革の理念の組織化および強化を意味する」「対抗宗教改革との闘争において形成された」「プロテスタンティズムの古典的時期」「プロテスタント・スコラ主義」「それ以後のすべてのプロテスタント神学の基礎を形づくった」(427)
2. 「正統主義はまた、政治的にも重要な意味をもっていた」、「アウグスブルクの宗教的講和[一五五五年]以降、領邦君主やその他の政権は、彼らの領邦における信仰告白を決定する権利を有することとなった。そのためプロテスタント的君主たちは彼らの神学的立場を定義することができなければならなくなったのである」、「神学的問題は同時に法律問題や政治的決断をも含んでいたのである。」(429)
4. 「正統主義神学の最初の問題の一つは、その哲学に対する関係」「哲学は神学のなかにはいり込んでいき、そしてすべての正統主義的体系はそれを土台として構築されるような根底がつくり出された」、「正統主義的そしてルター派的な神学の古典的体系の中心的代表者」「ヨーハン・ゲルハルト(Johann Gergard, 1582-1637)」「『ロキ・コムムネス・テオロギキ』(Loci communes theologici)」、「九巻」「プロテスタント・スコラ学」「最盛期」「トマス・アクィナスに比較しうる」(432)
5. 「二つの原理」「内容原理と形式原理」「内容原理とは義認の教理のことであり、形式
6. 「「非回心者の神学」(theologia irrogenitorum)」、「回心者の神学」(theologia regenitorum)

(2) 敬虔主義

7. 「敬虔主義は、正統主義神学のこのような客観主義に対する宗教的主観性の反動であった。」(439-440)
8. 「シュペナー(Philipp Jakob Spener, 1635-1705)」、「正統主義はルターの一面を把握したにすぎず、ルターの他の面は教説の客観的内容のために抑圧されたということを彼らが主張したのは、正しかったのである」(440)
9. 「敬虔主義者は、社会的実践に取りくんだ最初の人々であった。彼らはハレに最初の孤児院を創立し、最初の伝道活動に着手した」、「神学とは何よりもまず実践的訓練であった。真の認識の前提は彼らによれば信仰であった。したがって、それと関連して積義が強調されそして聖書研究が組織神学に代わるようになった。組織神学に対する聖書神学の優位」(440)
10. 佐藤敏夫『植村正久』新教出版社、1999年。
「十七世紀の正統主義時代のあとを受けて敬虔主義が広がって行くこと、しかも後期敬虔主義といってもよい、広義の信仰復興運動が世界宣教運動を推進した功績は大きい。」

(12)

(3) 合理主義と敬虔主義の関係

12. 「古代文化においても近代文化においても、合理主義は神秘主義の子である」、「合理主義は、あらゆる人間の本質のなかに現存している「内的光」あるいは「内的真理」の

神秘主義的経験から発展してきた」、「理性原理は、われわれの内奥における神的なもの
の現在についての神秘主義的経験から生じる」、「クエーカー主義」(442)

(4) 現代宗教論の前提としての近代

13. 近代の知的世界の状況が、以降の思想状況を規定している。

ポスト近代という近代？

14. プロテスタント時代としての近代：伝統的なキリスト教世界（コルプス・クリスティ
アヌム）の解体によって規定された時代

15. いつから近代か：トレルチ → 古プロテスタンティズム、新プロテスタンティズム

(5) 啓蒙主義的宗教論（17～18世紀、イギリスからフランス・ドイツへ）

20. エドワード・ハーバード、ジョン・ロック、ジョン・トーランド、カント

21. 理神論、キリスト教の合理化の試み → キリスト教の解体・宗教批判から無神論へ。

22. 宗教本質論として：信仰とは、信仰命題を真理として受け入れること。知的営み。

(6) 啓蒙主義の限界・問題性

23. 理性の普遍性と合理性

啓蒙的な普遍性は人間と文化の個別性を正当に扱うるか → ロマン主義

啓蒙的な合理性概念は一面的ではないか → 基礎づけ主義批判

芦名定道「現代キリスト教思想と宗教批判—合理性の問題を中心に—」『宗教研究』（日
本宗教学会）第82巻、357-2、2008年9月、pp.227-249。

John H. Hick, *Philosophy of Religion*, Prentice Hall, 1963. (邦訳あり)

24. キリスト教あるいはキリスト教思想は、「近代」「啓蒙」に対して、どのような態度
を取ってきたか、取り得るか、取るべきか。

近代の推進者・共犯者としてのキリスト教／……

／近代の批判者としてのキリスト教／……

／反近代の代表者・原理主義者としてのキリスト教

↓

近代は、キリスト教にとっての危機か、あるいはチャンス（危機におけるチャンス）か？

成熟した社会（成人した世界）におけるキリスト教（ボンヘッフアー）とは？

<トレルチ「近代世界の成立にたいするプロテスタンティズムの意義」『トレルチ著作集
8』ヨルダン社>

<近藤勝彦『トレルチ研究 下』教文館> 71-83頁

・「自然法」は、キリスト教の「社会哲学」ないし「社会教説」の成立の決定的な契機

・「トレルチ」「絶対的自然法」と「相対的自然法」の区分

「樂園の絶対的・原初的自然法」 → 「ゼクテ型」

「墮落を前提として、合理的で強制的な組織によって罪を抑制しながら
救いを与える相対的自然法」 → 「教会型」

・「ルター的自然法」「支配権力に対する徹底して保守的な賛美となり、身分と職業の体
系への家父長的忍従となった。」

「カルヴァンにおいては相対的自然法と絶対的自然法の区別は、ルターの場合ほどには強
調されていない。」 → 新カルヴィニズムの自然法・自由教会カルヴィニズム

自由教会、寛容、良心の自由

3. ヨーロッパ世界の拡大とキリスト教1

<問題>

ヨーロッパ文明に関連した「文明の衝突」(ハンチントン『文明の衝突』集英社、原著1996年)は、現代ではなく、近世・近代に当てはまる。近世は、ヨーロッパ(ル=ゴフによれば、都市的文明としてのヨーロッパは13世紀に確立した。スコラ的文化的総sub)が世界文明としての基礎を構築したがまだ非ヨーロッパ文明が健在、近代は、文明としてのヨーロッパの勝利へ。現代は、おそらくは文明間の衝突ではない。

(1) 大航海時代とヨーロッパ覇権

1. 大航海時代(15世紀~17世紀):

- ・イベリア半島の再キリスト教化(レコンキスタの完成、13世紀までに)

海洋帝国ポルトガルとスペインとによる世界分割

1492年: コロンブスのアメリカ大陸到着

1493年: 教皇子午線(教皇境界線)を設定

東をポルトガル、西をスペインが領有。

1494年: トルデシヤス条約で分界線を西経46度37分に変更(18世紀には無効化)

↓

- ・スペインがアメリカ大陸の大部分を、ポルトガルがブラジルを領有
- ・カトリックの世界宣教と列強の世界戦略の一体化
- ・17世紀は、オランダとイギリスへ。

2. 世界の情報がヨーロッパへもたらされる。

多様な宗教の存在 → 宗教としてのキリスト教、キリスト教の立場からの宗教概念

キリスト教の近代的自己理解

一神教/多神教

実定宗教に対する自然宗教(人間の自然本性に基づく。啓蒙的合理主義)

↓

宗教学の成立の前提

(2) 対抗宗教改革とイエズス会

3. 対抗宗教改革(カトリック改革)・トリエント公会議(1545~1563年)

- ・中世の神学、慣習の確認
 - ・ウルガタ聖書の正統性の確認と改訂
 - ・聖書と伝承(ローマ教会の教導権)
 - ・7つの sacrament、実体変化説、煉獄の存在

4. イエズス会、「教皇の精鋭部隊」の創設(1534年。正式な認可は1540年)

イグナチオ・デ・ロヨラ(1491-1556)ら

高等教育を中心とした教育活動と社会正義事業

↓

世界宣教・世界戦略

5. 17世紀: ヨーロッパ諸国が絶対王政のもとでナショナリズムを強める。

国民国家の枠を超えるイエズス会の活動と対立。

1773年に、クレメンス14世によりイエズス会は禁止(1814年にピウス7世によって復興)。

6. ラテン・アメリカ。

ブラジルにおけるイエズス会宣教(マヌエル・ダ・ノブレガ、ホセ・デ・アンチエタら。1549年には)。→ペルー、メキシコを経て、フロリダとカリフォルニアに。

7. イエズス会世界宣教の基本方針としての「適応主義」

宣教地の文化や言語を学び、現地の宗教的文化的状況に適応した宣教方針。

↓

軋轢：ほかの修道会との間に(中国での典礼論争など)。インディオを保護しようとするイエズス会員はスペインとポルトガルの奴隷商人およびそこから利権を得る政府高官に目障り→ポルトガルによるイエズス会迫害

8. 「キリスト教思想における「適応の原理」の射程」(キリスト教学専修『キリスト教学研究室紀要』6号、2018年3月)・火曜日2の特殊講義

「中国における本格的なカトリック宣教は、元代(13世紀～14世紀)のフランシスコ会による活動に遡るが(モンテ・コルビーノ)、イエズス会も、ザビエルの意志を継いで、マテオ・リッチ(Matteo Ricci)やミゲル・ルッジェリ(Michele Ruggieri)らによって、中国伝道を開始した。

「インド、そして後に日本でそうであったように、この明敏な、将来を見通した司祭(ヴァリニャーノ。引用者補足)は、その後のイエズス会の中国についての計画に足跡を残した。彼は数ヶ月間マカオに滞在して、できる限り中国文化を研究し、イエズス会が略奪者の西洋人だというイメージを断ち切らねばならないと確信して、宣教師たちのための一般原則を編み出した。中国人の知的・精神的価値観に深い共感と尊敬をもつこと、可能な限り完全な言語の駆使能力を得ること、科学の知識を信仰を紹介する足がかりにすること、著述と対話による使徒職を展開すること、この国の政府の基層である知識階級に特に関心を払うこと、信仰に基づいた徳を第一義とすること。」(ウイリアム・バンガード、2004、194)

ヴァリニャーノはルッジェリをマカオに派遣して中国を学ばせたが、リッチは、「たぐいまれな精神力と人間性に恵まれ、中国文化の価値に対する評価とその言語の完全な習得の点で、ヴァリニャーノの原則を完璧に体現した」(同書、196)。ここでヴァリニャーノの原則と呼ばれるものが、宣教方針としての適応主義であり、これは本稿で適応の原理として論じてきたものに基づいている。リッチによる適応主義の実践は、ヨーロッパの自然科学の知見・文物(時計、プリズム、油絵、世界地図など)を中国の知識階級に紹介しその改宗に努力したことなどに現れているが、それは中国語で著された『天主実義』といった著作から読み取ることができる。⁽²⁰⁾

『天主実義』は、リッチ自身がその序文において明言しているように、儒教の教えとカトリック教理の帰一の論証を目的として書かれた教理解説書であり、そこにはリッチ自身の儒教観が強く反映されている。そこではまず天地万物の創造主宰者である『天主』の唯一絶対性などが説かれるとともに、カトリック思想の立場から中国の伝統的諸思想に批判が加えられ、仏教・道教の『空』『無』の説を『天主』の理にもとる異端であるとして排斥し、さらに儒教における仏・道二教要素の混入を否定する意味で『三函教』、すなわち三教合一思想の理論的矛盾を論駁している。後藤基巳氏によれば、リッチは『近世儒教の太極理気説やそれに本づく無神論的見解をも異端になすむ後儒の曲説と断じ去った後に、詩・書・易・礼記を引用しつつ儒教經典の古義を検討して、そこで語られる

〈上帝〉ということば』は、決して『単に蒼々たる虚空をさすものではなく、その中に存する最高至善なる神格者への畏敬尊崇に外なら』ず、また『靈魂の不滅および鬼神の存在 に対する信仰が古代儒教においても是認されている事実などを指摘して、してみれば上帝・鬼神 を尊崇する儒教と天主の信仰を説くカトリックの教説とは帰を一にする』)と結論するに至ったようである。これは適応主義の中国における見事な実例と言ってよいであろう。」(狭間、2005、62-63)

この「適応主義」は、ヴァリニャーノ自身によって、日本宣教に用いられた。それは、「布教地諸国民の人種、言語、民族、文化、社会、道徳、心理、宗教などの特異性を考慮し、人間性という共通の遺産を反映する各文化の健全で有効かつ優れた価値を認め、保存し、高めて利用するよう、出来る限り最大の理解を持って宣布することであり」(高橋、2016、136)、また、日本人のイエズス会士養成のためのセミナリオ(神学校)、ノビシアード(修練院)、コレジョ(大学)、さらにヨーロッパから派遣されて来る宣教師が日本語と日本文化、生活・習慣を身に付けるための日本語学校(大村)の創設にも現れている。

このイエズス会の宣教方針は、インドでも中国でも同じカトリック教会内部で批判を受け、一端後退を余儀なくされた。⁽²¹⁾しかし、「教皇ベネディクト 15 世(1914-1922)がそれを是としてより以後、それは歴代の教皇によって継承され、ローマ・カトリック布教の基本方針となったのである」(狭間、2005、69)。

(19)本稿におけるイエズス会とその宣教方針としての「適応の原理」については、次の文献が参照された。

- ・ウイリアム・バンガード『イエズス会の歴史』原書房、2004年。
- ・狭間芳樹「日本及び中国におけるイエズス会の布教方策——ヴァリニャーノの「適応主義」をめぐって」(『アジア・キリスト教・多元性』第3号、2005年、55-70頁)。
- ・高橋勝幸「A・ヴァリニャーノの適応主義の現代的意義」(『アジア・キリスト教・多元性』第14号、2016年、133-147頁)。

(20)マテオ・リッチ『天主実義』(東洋文庫)柴田篤訳、平凡社、2004年。また、マテオ・リッチの中国宣教に関しては、ジャック・ジェルネ『中国とキリスト教——最初の対決』(法政大学出版局、1996年)も参照。

(21)インドのイエズス会による宣教(特に、ロベルト・デ・ノビリイ)における、宣教の成功とそれに対するキリスト教のヒンドゥー教化という批判、そしてイエズス会の活動停止といった経過(17世紀～18世紀)——中国における動向と並行している——については、葛西實「インド」(日本基督教出版局編『アジア・キリスト教の歴史』日本基督教団出版局、1991年、所収)、特に、「3. ローマ・カトリック教会」(468-473頁)を参照。」

(3) キリスト教宣教の両義性

9. 西欧キリスト教世界の優越性

近代的国民国家と植民地主義 → キリスト教宣教における素朴な絶対主義
19世紀型の宣教方針

10. 西欧近代文明の伝播と非西欧における西欧近代文明のさらなる展開の可能性

グローバル化の意味。

非西欧諸地域の西欧近代文明に基づく西欧の凌駕？

西欧キリスト教に対しても妥当する？

(4) アフリカとキリスト教

David Tonghou Ngong (ed.), *A New History of African Christian Thought. From Cape to Cairo*, Rourledge, 2017.

Introduction (David Tonghou Ngong)

11. サハラ以北：古代からの連続性

- ・アレクサンドリア（マルコがアレクサンドリア教会創設者という伝説）
- ・アフリカ教父：オリゲネス、テルトゥリアヌス、キプリアヌス、アウグスティヌス
- ・コプト正教会（Coptic Orthodox Church）：修道制の伝統、10-15%
- ・エチオピア正教会：332年を創設年とする。イスラムの圧力下で一貫して国教の地位。80%以上。

12. サハラ以南：15世紀以降の二つの波。

- ・ポルトガルの支配下でのキリスト教の導入（15世紀。第一の波）

東アフリカ宣教はイスラムとの抗争によって後退。

西アフリカ宣教はポルトガルとスペインによる奴隷貿易の基地になったことより停滞

- ・17世紀からはじまり、本格的には18世紀以降。「キリスト教宣教と奴隷貿易の二つの動機の混合」、「宗教と公共政策との間に密接な連関」→奴隷廃止の運動へ（19世紀）。
- ・19世紀のアフリカ宣教は本格的に進展（第二の波）

↓

20世紀、アフリカのキリスト教が爆発的に展開する。

13. 多様性、しかし一つのアフリカ大陸：

- ・サハラ以北以南の線引きは、西欧的・イデオロギー的。「他者としてのアフリカ」。「地理的また歴史的に一体化した大陸は多くのもの共有している」（ヌゴング（David Tonghou Ngong）、2）。

・一つのものとして大陸という前提でアフリカのキリスト教思想の発展を理解する試み。三つの構成原理：アフリカのキリスト教思想の顕著な諸要素の例証、アフリカのキリスト教と人々にとっての決定的な問題に接近するためにこの諸要素をどのように用いるかを示す、古代のアフリカ・キリスト教思想の現代的意義を示す。

<参考文献>

1. ヴァージニア・ファヴェリア、R・S・スギルタラージャ編『〈第三世界〉神学事典』日本キリスト教団出版局、2007年。
2. 宮本正興+松田素二編『新書アフリカ史』講談社現代新書、1997年。
3. エイドリアン・ヘイスティングズ『アフリカのキリスト教——ひとつの解釈の試み』教文館、1988年。
4. 吉田憲司『宗教の始原を求めて——南部アフリカ聖霊教会の人びと』岩波書店、2014年。
5. 土井健司編『1冊でわかるキリスト教史——古代から現代まで』日本キリスト教団出版局、2018年。